

カンガンハリ遺跡から出土した「ブッタの誕生」図について

著者	中西 麻一子
雑誌名	真宗文化：真宗文化研究所年報
巻	21
ページ	1-19
発行年	2012-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000665/

論 文

カンガンハリ遺跡から出土した 「ブッダの誕生」図について

佛教大学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程

中 西 麻一子

1. はじめに

ブッダの誕生伝説を伝承する諸文献を整理すると、ブッダの一生涯を物語る仏伝文学として語られる以前に、ブッダの誕生に関する諸伝承が初期仏典中に確認される。そして、それに対応する「ブッダの誕生」図（以下「誕生」図と省略）が極めて早い段階から成立した可能性がある。そのような文献の発達史と図像の展開過程を踏まえて、新発見のカンガンハリ遺跡（以下 Kanganhalli と省略）から出土した上段レリーフ石版 No.15（以下 Kanganhalli 15 と省略）の図像内容とその特徴を観察し、インド古代初期仏教美術¹にみられる「ブッダの誕生」図の新たな具体例として位置づけることを本稿の目的とする。

2. ブッダの誕生伝説と「誕生」図について

我々の知る「誕生」図については、仏像の出現とともにガンダーラで初めて図像化が行われたと考えられてきた。同主題に関しては肥塚隆 [1976]、上枝いづみ [2007] 等によって文献整理が行われ、その特徴と成立の背景も明らかにされている²。その研究成果をまとめると、ほぼ全てのガンダーラから出土した「誕生」図には以下のような特徴があると指摘されている（図1参照）。

① 仏母マーヤーが右手で樹を掴み、



図1 誕生 Sikri 出土 2-3 世紀 h.35 cm w.47 cm

- ②ブッダが仏母マーヤーの右脇から誕生する。
- ③インドラ神（及びブラフマー神）がそのブッダを受け取る。
- ④天の太鼓が鳴り、神々が指笛を吹き、天衣の裾を振り上げてブッダの誕生を歓喜する。

以上のような従来の定説に対して、次のような事実を指摘することが出来るであろう。インド古代初期仏教美術の代表例である Bhārhut (Śunga B.C.1：南門屈曲欄楯 Prasenajit Pillar 中・下段区画 (P 29)) の碑文・図像の解説・解明を行ったリュース [1941] [1963]、及び同様に Ajaṇṭā 前期石窟 (Sātavāhana B.C.1：第 10 窟 左側壁面) の碑文・図像の解説・解明を行ったシュリングロフ [1981] はすでにこれらのインド古代初期仏教美術においてブッダの誕生伝説が図像化されていることを指摘している³。彼らの指摘は、次のようなブッダの誕生伝説を伝承する諸文献によっても確認される⁴。

ブッダの誕生伝説を伝える諸文献のうち最も古い伝承は *Suttanipāṭa* (Nālaka-sutta, 第 679-683 詩節) の伝える誕生伝説である。古層に位置する Nālaka-sutta の冒頭部分には、アシタ仙によって、ブッダが誕生したことを知り、歓喜する神々の姿が天界で目撃され、出産場所がガルンビニーであったことを語っている⁵。また同じく韻文文献である *Theragāthā* 第 534 詩節では、ブッダの母の名がマーヤーであると伝えている⁶。しかし、両伝承ともに *bodhisatta* という語がすでに現れているので Bhārhut よりも古い文献伝承であるとは言え

カンガンハリ遺跡から出土した「ブツダの誕生」図について



図2 Bhārhut 南門屈曲欄楯
Prasenajit Pillar (P 29)

ない可能性もある。干潟龍祥 [1969] は *bodhisatta* の語が Bhārhut の碑文には見られないことを指摘して、Bhārhut の彫刻が完成した時にはまだ *bodhisatta* という語は知られておらず、従って *bodhisatta* の語は Bhārhut より後の紀元前 1 世紀初頭以後、紀元後 1 世紀後半までの間に出来上がったと述べている⁷。上述した状況を踏まえるならば、現存最古の仏教彫刻を有する Bhārhut 段階の「誕生」図は、少なくとも Nālaka-sutta の冒頭部分に伝承されるような天界における神々の歓喜と讃嘆だけによって表現された「誕生」図であったであろう。初期仏典中に語られるブツダの誕生伝説に関する記述を考慮すれば、リュースダーズの指摘は妥当な判断であったと思われる (図2 参照)⁸。なお Bhārhut の「誕生」図については、以下に論ずる Acchariyabbhuta-dhamma-sutta (MN. 123.) に説かれているような具体的なブツダの誕生伝説を図像化していないので、研究者によっては「降魔成道」図と呼ばれる魔が敗北する場面であると指摘されることもある⁹。続く Ajaṇṭā 第 10 窟に描写された「誕生」図は、剥落等の損傷により肉眼で確認し難く、描き起こし図に基づいて解釈されているので明確には判断し難いが、Bhārhut では未だ描かれていなかった仏母マーヤーが描かれている。しかしながらガンダーラから出土した「誕生」図の特徴とは明ら



図3 Ajañtā 第10窟（左壁）描き起こし図

かに異なっていることが観察される（図3参照）。

- ①仏母マーヤーが左手で樹を掴み、
- ②ブッダが仏母マーヤーの（右もしくは左）脇から誕生する。
- ③神々が出胎するブッダに対して指をさしたり、誕生するブッダを受け取ろうとしている。
- ④天の太鼓が鳴り、神々が天衣の裾を振り上げてブッダの誕生を歓喜する。

Ajañtā 第10窟の壁画を解明したシュリングロフは、「誕生」図の上方に位置する壁画と同じ時代に刻まれた碑文の解読を同時に試みている。文字の上半分は剥落してしまって母音の符号が失われた状態であるものの、彼はこの碑文が「誕生」図に関連した内容であると解釈している¹⁰。また碑文の冒頭には *bhagavat* という語が確認されるので、Bhārhut と同様に Ajañtā 前期石窟でも *bodhisatta* の語が使用されていなかったということに留意しておきたい。Ajañtā 第10窟に描かれた「誕生」図は、仏母マーヤーが樹を左手で掴む姿を描き、ブッダが誕生する姿を表現していることから場面の背景を天界では無く、Nāḷaka-sutta に記述されたルンビニーに設定している。その仏母マーヤーが左手で枝を掴むということは、左の腕を挙げて脇腹が露出するので、その部位からブッダが誕生したと考えられるが、Ajañtā 第10窟の「誕生」図の仏母マーヤーの姿勢では、どちら側の脇からブッダが誕生したのか判断し難い。これよ

カンガンハリ遺跡から出土した「ブツダの誕生」図について

表1 インド内陸部の主な作例

出土地	所在（現所在地）	年代	出典
Bhārhut	南門屈曲欄楯（P 29）	Śunga B.C.1	Coom [1956]. Pl.8, Fig.23. Pl.9, Fig.26
Bodhgayā	北西角柱 No.64	Śunga B.C.1	Coom [1935]. Pl.33
Ajañṭā	第10窟左側壁面	Sātavāhana B.C.1	Schlingloff [2000]. vol. III, X, 12.
Amarāvātī	大英博物館 OA 1880.7–9.44	Sātavāhana A.D.2	Knox. Fig.61 cf. Schlingloff [2000]. p.48.
Nāgārjunakoṇḍa	Nāgārjunakoṇḍa 博物館	Ikṣvāku A. D.3	Stone. Fig.162, Fig.188, Fig.210, Fig.228

り後の2世紀頃から「誕生」図を制作し始める南インドの仏教遺跡 Amarāvātī (Sātavāhana A. D. 2: Stūpa 基壇の石板) や Nāgārjunakoṇḍa (Ikṣvāku A. D. 3 : āyaka パネル) では、仏母マーヤーは左手で樹を掴み、左脇を露わにしているのがガンダーラと異なる左脇からブツダが誕生した姿を描いている。

では、これら「誕生」図に関する人体表現や情景描写について、文献伝承においてはどのような記述が確認されるのか、以下に検討しておこう。

ブツダの誕生伝説を伝える諸文献のうち、*Mahāvastu* (Ed. Senart, II, p. 20⁹⁻¹⁷)、*Lalitavistara* (Ed. Lefmann, pp. 83–84)、そしてほとんどの漢訳の仏伝經典が「右脇より生まれる」（従右脅生『修行本起經』[T. 3, No. 184. 463c 11]）と記述するのに対して¹¹、*Suttanipāta* 以外のパーリ所伝のニカーヤ及び *Nidhānakathā* は「菩薩の母は立ったまま菩薩を出産する」（*ṭhitā va bodhisattam bodhisattamātā vijāyati*. MN. iii, p. 122¹⁶⁻¹⁷≒DN. ii, p. 14¹³⁻¹⁴）とほぼ同一の記述を伝承する。反対に「左脇より生まれる」という記述は一切見られない。ブツダの誕生について、右脇からの誕生を具体的に指定した漢訳の仏伝經典と、仏母マーヤーが立ったまま出産したことを強調するニカーヤの伝承と大きく2つに大別される。*Acchariyabbhutaḍḍhamma-sutta* では仏母マーヤーを他の女性と差別するために立ったまま出産すると語っている。

yathā kho pan', Ānanda, aññā itthikā nisinnā vā nipannā vā vijāyanti, na h' evaṃ bodhisattaṃ bodhisattamātā vijāyati. ʾthitā va bodhisattaṃ bodhisattamātā vijāyatīti. (MN. iii, p.122¹⁴⁻¹⁷≒ DN. ii, p.14¹¹⁻¹⁴) 「アーナンダよ。他の女性達は座って、あるいは臥して出産するようであるが、けっしてそのように菩薩の母は、菩薩を出産しません。菩薩の母は菩薩を立ったまま出産します」

Acchariyabbhutadhamma-sutta はアーナンダがブツダからかつて聞いた希有であり未曾有である法の話としてブツダの誕生に関する 19 種の事象を語る經典である¹²。ニカーヤに収められたこの經典はブツダの誕生伝説を伝える諸文献のうち、その源泉となる經典であると研究者によって指摘されてきた¹³。しかしながら、この經典内には *Nālaka-sutta* 及び *Theragāthā* に言及されるルンビニーやブツダの母の名であるマーヤーという語句は見い出せない。出産時もしくは出産前後の具体的な状況のみを語っており、それらの記述に関しては、最初に語られたものであると言えよう。この經典に記されたような具体的なブツダの誕生場面に基づいて、Ajaṇṭā 前期石窟における「誕生」図の図像表現が出来上がったと考えられる。そして「菩薩の母は立ったまま菩薩を出産する」というニカーヤの伝承を反映するように、インド古代初期仏教美術に位置付けられる Bodhgayā (Śunga B.C.1 : 北西角柱 No.64) の「誕生」図に描かれた仏母マーヤーは、両手を挙げて樹木を掴んでいる姿で表現されている (図4を参照)¹⁴。

なお誕生したブツダを受け取る役目を果たす人物も二分される。四天王が誕生したブツダを受け取ったと記す文献は *Acchariyabbhutadhamma-sutta*、*Mahāpadāna-suttanta*



図4 Bodhgayā 北西角柱 No.64 (部分)

カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について

(DN.14.)、*Nidhānakathā*、*Mahāvastu*、『中阿含経』「未曾有法経」、『長阿含経』「大本経」、『太子瑞応本起経』、『異出菩薩本起経』、『過去現在因果経』の9経であり、それ以外の文献では主に帝釈が受け取り役として登場する¹⁵。

以上、ブッダの誕生伝説を伝承する諸文献の発達過程に基づき、インド古代初期仏教美術に位置づけられる「誕生」図について観察してきたことをまとめると次のようになる。ブッダの誕生伝説は、ブッダの一生涯を物語る仏伝文学として創作される以前に段階的な変遷を経て成立している。最も古い伝承である *Nālaka-sutta* 及び *Theragāthā* に記される記述に続いて、ブッダの出産時もしくは出産前後の具体的な状況のみを記した *Acchariyabbhutadhamma-sutta* の断片的な記述によってそれが確認出来る。そして仏伝文学として伝承される段階では、この3経によって知られるブッダの誕生伝説に基づいて改作・増広された誕生伝説が仏伝文学の内部で種々に創作される。

そのようなブッダの誕生伝説の発達に対して、インド古代初期仏教美術に位置づけられる *Bhārhut*、*Bodhgayā*、*Ajanṭā* 前期石窟の「誕生」図は、ブッダの誕生伝説の源泉となる3経 (*Nālaka-sutta*、*Theragāthā*、*Acchariyabbhutadhamma-sutta*) と深い関係にあると言えよう。続く段階では、ガンダーラと南インドとの「誕生」図を比較し、その地域的な表現方法の差異についてシュリングロフが指摘するように、ガンダーラの「誕生」図の特徴は北方の文献伝承に従い、南インドは南方の文献伝承と関係していると考えられる¹⁶。

このような「誕生」図に関する研究状況を把握したうえで、新発見の *Kanganhalli* から出土した「誕生」図がどのような内容を保持し、伝承していたのかを次に考察する。

3. *Kanganhalli* を飾る上段レリーフ石版 No.15

Kanganhalli は、インド南部のカルナータカ州の北部にあるグルバルガ県に流れるビーマ川 (クリシュナー河の支流) の左岸に位置する。以前は *Sannathi* の大ストゥーパと呼ばれていたが、遺跡に最も近いところにあるカンガンハリ

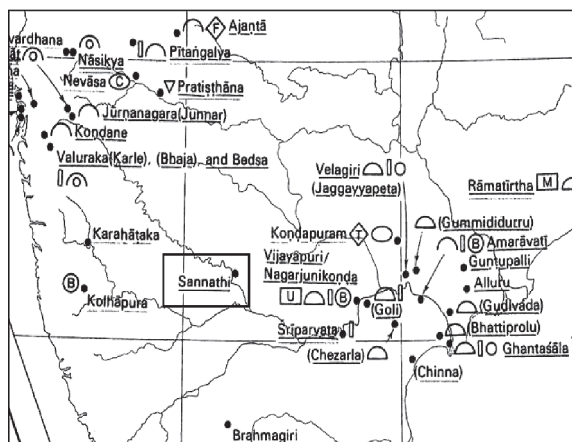


図5 インド地図（部分）クリシュナー河流域

村にちなんで、現在は Kanganhalli もしくは Kanaganahalli と呼ばれている¹⁷（図5参照）。2008年に開催されたカンガンハリ学術シンポジウム¹⁸での欧米研究者等による一応の年代設定が紀元前1世紀から紀元後4世紀の間であると、Kanganhalliが段階的な変遷を経て造営されていると考えられている¹⁹。筆者が2009年2月と4月の2度に亘り実施した現地調査では、Kanganhalliのストウパの周辺に出土した多数の彫刻の断片を平地に並べて復元している最中であつた²⁰。その中でも最も注目されるのは、ストウパの基壇を飾っていた3mを超える長方形のレリーフ石版である。59枚のレリーフ石版には Jātaka や個々の仏伝記事、そしてアショーカ王やサータヴァーハナ朝の王族達の肖像が彫刻され、それぞれにその図像に関連した内容の碑文が刻まれている。本稿で取り上げる Kanganhalli 15 も散在していた断片を集めて復元するために地面に移されていた。移動して置かれている位置から推測すれば、本来の設置場所はストウパの南側基壇部分であつたと考えられる²¹。レリーフ石版は縦に上・下とハンサ鳥の装飾帯によって2つの区画に分割されているが、必ずしもその上・下の図像が関連した内容であるとは限らない。本稿で取り上げる「誕生」図は Kanganhalli 15 の下の区画に位置する。以下にその特徴を挙げる（図

6 参照)。

- ①仏母マーヤーが左手で樹を掴み、
- ②ブッタが仏母マーヤーの左脇から誕生する。
- ③四人の天人（四天王）がそのブッタを受け取る。
- ④産湯係の従者がブッタの存在する方向を向いて両手を合わせて合掌する。



図6 Kanganhalli No.15 下段区画

Kanganhalli 15 に描かれた「誕生」図は誕生するブッタを表現せずに、周囲の人物の表現によって

そこに存在しているかのように描き、ブッタを直接表現しないというインド古代初期仏教美術の特徴を踏襲している。仏母マーヤーは左手を大きく上に挙げて樹を掴み、左脇を露出することでその箇所からブッタが誕生したことを象徴的に表現している。右手は右耳のイヤリングを掴んでいるが、類似した表現を伝承する Amarāvati, Nāgārjunakoṇḍa では見られない表現である²²。誕生したブッタを受け取るために長い布を両手で持っている4人の男性は皆同じポーズをとって、視線は仏母マーヤーに向けられている。彼らは頭部にターバンを冠り、それぞれのターバンの装飾を描き分けることで区別される。Kanganhalli の「誕生」図は四天王を誕生したブッタの受け取り役として描いていると判断することが出来る。続いて④に指摘した産湯係の従者とは仏母マーヤーの前にとりわけ小さく描かれる人物のことを指し、合掌した両手と視線は長い布と一緒に持つ四天王に向けられている。この小さい人物は Bodhgayā, Amarāvati, Nāgārjunakoṇḍa の「誕生」図にも登場する。それらの図像には小さい人物とも

に椅子や水差しが置かれていて、ブッダが誕生した後に産湯を行うための用意が整っていることが分かるので、誕生したブッダのために産湯を行う人物であると以前から指摘されてきた²³。さらに従者の役割はそれのみに留まらず、登場人物が仏母マーヤー、四天王、従者と最小限の人数によって構成されながらも、四天王と従者の視線に変化をつけることで、時間が異なった場面を同じ図の中に表現する、一図二景の表現形式をとっているのが分かる。彼らの視線の先には表現されていないブッダが存在しているのであり、四天王が見ているのは、仏母マーヤーの左脇腹から誕生しようとするブッダである。続いて従者は、四天王が持つ布の上に存在する仏母マーヤーから誕生したばかりのブッダを見上げて合掌している。以上が Kanganhalli 15 の下区画に描かれた「誕生」図の表現であるが、「誕生」図の下枠の部分には、それに関連した彫刻付きの碑文が刻まれているので、合わせて次に検討する。

4. Kanganhalli 15 に刻まれた彫刻付き碑文

59 枚の上段レリーフ石版にはその図像に対応した内容が記された碑文が刻まれている。Bhārhut のように寄進者名と主題の両方が刻まれているレリーフ石版は数点確認できるのみで、殆どが主題のみを刻んだものであった。本稿で取り上げる「誕生」図が描かれた Kanganhalli 15 の下枠部分には、5(6) 文字の Brāhmī 文字の配列によって *bhāḥavato jā(tī)* 「世尊の誕生」と記されている(図7を参照)²⁴。碑文は残念ながら最後の文字部分に破損を被っており、またここでも *bhagavat* という語が刻まれていることが明確に確認できる。ところ



図7 Kanganhalli No.15 碑文

カンガンハリ遺跡から出土した「ブツダの誕生」図について

が、Kanganhalli 上段レリーフ No.38/23 と Aśoka 2 の碑文からは、*bodhisato Kusarāyā* 「菩薩クシャ王」と *[dh]isato somarāt[o]* 「菩薩ソーマラータ」と記された *bodhisatta* の語が確認されるのである²⁵。従って Kanganhalli の上段レリーフを制作する段階では、*bodhisatta* の語が知られていたと考えられる。また、この文字の書体に関しては、Bhārhut の書体と酷似しているようである。その一方で、他のレリーフ石版には文字の先端をくさび形にした書体や、母音の符号を伸ばし、先端にカーブを付けたようなより装飾的な書体も散見されるので、Kanganhalli の上段レリーフ石版を Bhārhut まで遡らせることは出来ないであろう。Amarāvati 大欄楯の第1期欄楯の造営年代を、その書体の特徴によって Bhārhut と結び付け難いことを示した島田明〔2006〕が指摘するように、上述した書体が現れるのはサータヴァーハナ時代初期以降であり、加えて Kanganhalli 上段レリーフ No.39 には後期サータヴァーハナ朝の王であるプルマーヴィ王の肖像が描かれている²⁶。従って上段レリーフ石版は古い表現を伝承し保持しつつも、*bodhisatta* なる語の使用や、書体と歴史事実の両面を省みれば紀元前後半からプルマーヴィ王の治世頃までの間に制作されたと推測し得るが、具体的な年代論については今後の美術様式による比較分析や碑文の解説等の多面的な研究の成果として明らかにされることが期待できよう。

Kanganhalli 15 の碑文にはさらに注目すべき箇所がある。文字の上には浅い浮彫りによって「誕生」図に続く2場面が象徴的に表現されているのである。左側から順に解釈すると、2本の線が円形の器にめがけて弧を描き注がれているような表現が描かれており、その表現は誕生伝説直後のエピソードとして知られている産湯を入れる容器に注がれる天界からの冷水と温水を表現しているように見える。しかし、このような作例は他に例を見ない。該当箇所を *Acchariyabbhutadhamma-sutta* によって確認する。

yadā Ānanda, bodhisatto mātu kucchismā nikkhamati, dve udakassa dhārā antalikkhā pātubhavanti, ekā sītassa ekā uñhassa, yena bodhisattassa udakakiccaṃ karonti mātu cāti. (MN. iii, p. 123¹¹⁻¹⁴ ≅ DN. ii, p. 153³⁻⁶) 「アーナンダよ。

菩薩が母胎から出てきた時、2つの水のシャワーが空中から現れた。1つは冷たく、1つは熱いものであり、それによって菩薩と母のための水仕事（産湯）が行われた」

確かに類似した丸い円形の器は、リューダースが「誕生」図と同定した Bhārhut の南門屈曲欄楯 (Prasenajit Pillar) の中段レリーフにも描かれている (図2 参照)。画面の右上には、とりわけ太った裸体の人物が描かれており、右手を頭上に挙げて丸い円形の器を載せている²⁷。この人物については未だ十分に解釈されていない。この人物の背後には柱があり、その登頂には花輪らしきものを携えた象が備え付けられている。柱の根本にいる裸体の人物と合わせて観察すると、彼が頭上に器を持っているという表現は、上方から落ちてくるものを器によって受けるためであり、象によって象徴的に表現された天界からのシャワー（産湯）を受けているようにも思われる。

Kanganhalli 15 に刻まれた碑文の上部には、その円形の器に続けて左から右方向に7つの足跡が一直線に描かれ、それぞれに法輪が記されている。つまり7つの足跡を順に描くことによってブッダが7歩進んだことを示し、そして7歩目の足跡の傍に払子と傘蓋を記すことによって、7歩目に立っているブッダの存在を暗示している。それに対して Nāgārjunakoṇḍa (Stone. Fig.188, 210) の「灌水」図と「七歩（宣言）」図は、四天王の持つ布の上に7歩の仏足を描き、七歩伝説を表現している。ブッダが存在している場所の頭上には払子と傘蓋が宙に浮かび、その方角へ向けて合掌する女性 (Stone. Fig.210 では小さい女性) が「灌水」を表す水瓶と共に描かれている。Kanganhalli の図像に比べて、四天王が持つ布の上に仏足を描いたり、腰掛や水瓶を描くなど、誕生後のエピソード（「灌水」「七歩（宣言）」）を一図にまとめて描く傾向が見られる。

「灌水」と「七歩（宣言）」というブッダ誕生後のエピソードを両方伝承する諸文献²⁸を精査すると、「灌水」→「七歩（宣言）」の順序で語られる文献と、或いはその逆の順序で語られる文献と大きく2種に大別される。パーリ所伝のニカーヤ Acchariyabbhutatthamma-sutta、Mahāpadāna-suttanta と Nidhānakathā

カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について

に伝えられるエピソードのみが「灌水」→「七歩（宣言）」の順序で語られるのに対して、それに対応する漢訳経典『中阿含経』『未曾有法経』と『長阿含経』『大本経』をも含めた全ての漢訳経典が「七歩（宣言）」→「灌水」の順序で語られるのである²⁹。Kanganhalli 15 の碑文と一緒に描かれたブッダ誕生後のエピソードは、ブッダの歩行を7つの足跡によって左から右方向に一直線に描いているので、左から右方向へと場面が展開していると判断出来る。つまり、2つのエピソードは「灌水」→「七歩（宣言）」の順序で描かれており、それは指摘したパーリ所伝のニカーヤに伝承されるブッダ誕生後のエピソードと深い関係にあると言えよう。

5. おわりに

Kanganhalli から出土した「誕生」図の特徴を、以下のように整理することが出来る。

Kanganhalli 15 の下の区画には、図像の特徴からブッダの誕生伝説を図像化した「誕生」図が描かれている。続く碑文箇所への彫刻は、「灌水（産湯）」と「七歩（宣言）」図が描かれている。類似した表現を伝承する Amarāvātī と Nāgārjunakoṇḍa では四天王が持つ布の上に仏足を描いたり、腰掛や水瓶を描くなど、誕生後のエピソード（「灌水」と「七歩（宣言）」）を一図にまとめて描く傾向が見られるのに対して、Kanganhalli は、区画内の図像表現と碑文箇所の彫刻とを合わせると、「誕生」→「ブッダを四天王が受け取る」→「灌水」→「七歩（宣言）」と、場面展開を順序立てて追うことが出来る。図像表現からは、布の上に仏足を描かないことや、丸い容器に注がれる天界からの冷水と温水を象徴的に表現する図像によって、Kanganhalli の「誕生」図はそれらより古い様式を保持していると考えられる³⁰。そして文献伝承との比較からは、上記した場面展開を伝承する文献が、パーリ所伝のニカーヤ Acchariyabbhutaḍḍhammasutta、Mahāpadāna-suttanta と Nidhānakathā の3つの文献のみであったことから、Kanganhalli の「誕生」図がパーリ所伝のニカーヤに依拠した図像表現で

あると言える。

Kanganhalli 上段レリーフは *Bodhisatta* の語が使用し始められていた直後の図像表現を保存している。その事実を考慮すれば、「誕生」図は Bhārhut、Bodhgayā 及び Ajañtā 第10窟に描かれた「誕生」図よりも遅れた制作であったであろう。しかし上述したブツダ誕生伝説の発達史や図像表現の展開過程を通して観察すると、Kanganhalli の「誕生」図は、Amarāvātī や Nāgārjunakoṇḍa に描かれた南インドに伝わる「誕生」図の前段階の図像表現であり、むしろインド古代初期仏教美術の最終段階における「誕生」図の作例として新たに位置付けることが出来よう。

略号

Coom [1935]. = Coomaraswamy, Ananda K. *La Sculpture de Bodhgayā*. Paris, 1935.

Coom [1956]. = Coomaraswamy, Ananda K. *La Sculpture de Bharhut*. Vanoes, Editions d'Art et d'Histoire, Paris, 1956.

Knox. = Knox, Robert. *Amaravati, Buddhist Sculpture from the Great Stupa*, London, 1992.

MN. = *Majjima-nikāya*, 3 vols., Pāli Text Society.

Schlingloff [2000]. = Schlingloff, Dieter. *Erzählende Wandmalereien*. Vol. I Interpretation. Harrassowitz Verlag (Ajanta. Handbuch der Malereien 1), 2000.

Stone. = Stone, Elizabeth Rosen. *The Buddhist Art of Nāgārjunakoṇḍa*, Delhi, 1994.

T. = 大正新脩大蔵経 (Taishō Tripitaka), 高楠順次郎・渡邊海旭 (編), 東京, 1924–1935.

図版出典

図1 樋口隆康 (監修) 『パキスタン・ガンダーラ美術展図録』 展覧会図録, 東京, 1984, II–5. ラホール博物館蔵 Old No. 2335, New No. G. 13.

図3 Coomaraswamy, Ananda K., *op. cit.* [1956] Pl. 8, Fig. 23.

図2 Schlingloff, D., *op. cit.* [2000] Vol. III : *plates*. Pl. 12. (Die Nachzeichnung der Szene von Prof. Dr. Monika Zin)

図4 Coomaraswamy, Ananda K., *op. cit.* [1935] Pl. 33. (該当部分を拡大)

図5 Schwartzberg, Joseph E. (ed.) *A Historical Atlas of South Asia*. New York, 1992, Pl. III. C. 3. (該当部分を拡大)

図6 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』 前掲載書 [2011] p. 70. (Kanganhalli 15 (IMG_3399–3409) 筆者撮影) から複写

図7 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』 前掲載書 [2011] p. 95. (Kanganhalli 15 (IMG_3399–3409) 筆者撮影) から複写

附記

本稿は平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 20520050 による研究成果の一部である。末筆ながらここに記し、感謝申し上げます。

註

- 1 「インド美術史という古代初期とは、インドが歴史時代に入った前 6-5 世紀ころからクシャーン族の侵入する 1 世紀後半までを指し、前 2 世紀後半ころ初めて仏伝図が作られるようになった。」(肥塚隆 [1979] 『美術に見る釈尊の生涯』平凡社, p. 120.)
- 2 肥塚隆 [1976] 「インドにおける仏誕生の図像」『美術史』90-92, pp. 58-71. 上枝いづみ [2007] 「ガンダーラの「誕生」図にみる文化基盤」『密教図像』26, pp. 62-76.
- 3 Lüders, Heinrich [1941] *Bhārhut und die buddhistische Literatur*, (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, 26-3), Leipzig, pp. 52-62. [1963] *Bhārhut Inscriptions*, Revised by E. Waldschmidt & M. A. Mehendale. Ootacamund: Government Epigraphist for India (Archaeological Survey of India, Corpus Inscriptionum Indicarum II. 2), pp. 94-104. Schlingloff, Dieter [1981] "Die älteste Malerei des Buddhaleben." In *Studien zum Jainismus und Buddhismus: Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*. Bruhn, Klaus & Albrecht Wezler (eds.), Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, pp. 181-198 (Alt- und Neuindische Studien 23).
- 4 ブツダの誕生伝説を伝える文献資料を収集整理し、4 グループ (I ~ IV) に大別し以下に列挙する。I. (根本)説一切有部: 1. *Mūlasarvāstivādin Vinaya, Saṅghabhedavastu (MSV)*. (Ed. Gnoli, pp. 44²-46⁷) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』[T. 24 No. 1450, 108 a 3-7] 義淨訳 700-711. ≅ 『衆許摩訶帝經』[T. 3 No. 191, 939 b 5-11] 法賢訳 985-994. II. Pāli: 1. *Suttanipāṭa* (Sn.) *Nāḷaka-sutta*, v. 679-683 [Sn. p. 131¹⁹-133²] 2. *Majjima-nikāya* (MN.) 123 *Acchariyabbhutadhamma-sutta* [MN. iii, p. 122¹⁶⁻¹⁷] = 『中阿含經』「未曾有法經」[(根本)説一切有部] [T. 1 No. 26, 470 a 26-28/b 22-23] 僧伽提婆訳 397-398. 3. *Dīgha-nikāya* (DN.) 14 *Mahāpadāna-suttanta* (MAP.) [DN. ii, p. 14⁶-15²] = *Mahāvadāna-sūtra* (MAV.) [Ed. Fukita, pp. 62-63] [東トルキスタン有部] = 『長阿含經』「大本經」[法藏部] [T. 1 No. 1, 4 b 6-7] 仏陀耶舎・竺仏念共訳 413. 4. *Jātaka-attha-vaṇṇanā, Nidhānakathā* (Nid.) (J. I, p. 52²⁰⁻³⁰) III. 仏伝 (1) 1. *Mahāvastu* (Mvu.) [大衆部説出世間部] (Ed. Senart, II, p. 20⁹⁻¹⁷) ≅ 『仏本行集經』[T. 3 No. 190, 686 a 25-c 2] 闍那崛多訳 523-600. 2. *Lalitavistara* (LV.) ch. 7 (Ed. Lefmann, pp. 83-84) = 『普曜經』[T. 3 No. 186, 494 a 26] 法護訳 308. = 『方広大莊嚴經』[T. 3 No. 187, 553 a 3-7] 地婆阿羅訶訳 683. 3. 『修行本起經』[T. 3 No. 184, 463 c 11-13] 竺大力・康孟詳訳 197. 4. 『太子瑞應本起經』[T. 3 No. 185, 473 c 1-2] 支謙訳 222-226. 5. 『異出菩薩本起經』[T. 3 No. 188, 618 a 17-18] 聶道真訳 280-312. 6. 『僧伽羅刹所集經』[T. 4 No. 194, 122 b 16-17] 僧伽跋澄訳 384. 7. 『過去現在因果經』[T. 3 No. 189, 625 a 22-24] 求那跋陀羅訳 394-468. IV. 仏伝 (2) 1. *Buddhacarita* (Bc.), *Āśvaghōṣa* 著, I, v. 8-10 (Ed. Johnston, p. 1) = 2. 『仏所行讚』[T. 4 No. 192, 1 a 28-29] 曇無讖訳 414-426.

- ＝3.『仏本行経』[T. 4 No. 193, 58 b 20–21] 宝雲訳 424–453. ≒4. *Divyavadāna* (*Divy.*) No. 27 (p. 390²)＝5.『阿育王伝』[T. 50 No. 2042, 104 a] 安法欽訳 306.＝6.『雑阿含経』[T. 2 No. 99, 166 c 6–18] 求那跋陀羅訳 435–443.＝7.『阿育王経』[T. 50 No. 2043, 136 c 12–17] 僧伽婆羅訳 512. 仏伝 (3) 1. *Śākyasiṃha-jātaka* (*Śsj.*), v. 4 (Ed. Hahn, p. 152)
- 5 *Sn. Nālaka-sutta*, v. 683 [*Sn.* p. 132¹³⁻¹⁶] *so bodhisatto ratanavaro atulyo manusseloke hitasukhatāya jāto Sakyānaṃ gāme janapade lumbineyye, ten' amha tuṭṭhā atiriva kalyarūpā*. 「比類なき最高の宝であるかの菩薩が、人間界の内に、利益と安楽のために生まれた。シャカ族の村に、ルンビニーの里に、だから私達は満足し、大層喜んでいのです」
- 6 *Theragāthā* v. 534 [*Thera.* p. 57⁵⁻⁸] *Suddhodano nāma pitā mahesino Buddhassa mātā pana māyanāmā, yā bodhisattam parihaṛiya kucchinā kāyassa bhedā tidivasmi modati*. 「偉大な聖仙である父の名はスッドーダナであり、ブッダの母はマーヤーという名である。その彼女は菩薩を母胎によって守り、身体が破壊したあと（死後に）三十三天において楽しむ」
- 7 干潟龍祥『本生経類の思想史的発達』山喜房書林, 1969, pp. 57–61.
- 8 Bhārhut 南門屈曲欄楯は上・中・下の区画に分かれて図像が描かれている。リュエーダースはその中・下の区画を「誕生」図に同定し、上区画は碑文の解説に基づいて「菩提樹が、もしくはそれを取り囲んで建てられた建物」と解釈している (Lüders, H., *op. cit.* [1963] pp. 95–96.)。しかしブロックやクマーラスワミーは踏み込んで「成道」と解釈している (Bloch [1912] *Archaeological Survey of India Annual Report 1908–9*, p. 139, note 1. A. K. Coomaraswamy [1956] *La Sculpture de Bharhut, Paris*, p. 43.)。 *Nālaka-sutta* の第 683 詩節に続く第 684 詩節には、ブッダの成道説話が合わせて物語られている。この事実を顧みれば、Bhārhut 南門屈曲欄楯は上・中・下の区画全体によって *Nālaka-sutta* の冒頭場面を物語っているとも言えるであろう。
- 9 Schlingloff, Dieter [1982] “Āśoka or Māra? On the Interpretation of some Sāñchī reliefs.” In *J. W. de Jong Felicitation Volume*, Canberra, pp. 441–455. [1988] *Studies in the Ajanta Paintings, Identifications and Interpretations*. Delhi : Ajanta Publications (India), pp. 6–8. 宮治昭 [1994] 「インド古代初期美術の「降魔成道」の諸相」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 40, pp. 189–194. 「降魔成道」図であると指摘する根拠として、中段の区画中に描かれた人物の表現が指摘されている。左端に描かれている人物は、左手を頬に当てて、右手で木の枝を持っている。この表現は、Kanganhalli 11/08 の下区画にも「降魔成道」図中の魔の表現として描かれており、「降魔成道」図における魔の姿として定着するようである。リュエーダースも Bhārhut に描かれたこの人物を魔であるとしているが、Āsvaghoṣa が *Bc.* における誕生場面中 (*Bc.* 1, v. 27) に語った、「人々を救う師が生まれたとき、ひとり愛の神カーマ (Kāmadeva) のみが喜ばなかった (以下略) (梶山雄一 [他] 編 [1985] 『ブッダチャリタ 原始仏典第十巻』講談社, p. 6.)」を引用して、Bhārhut に描かれたこの人物は誕生場面中に登場する魔の表現であると指摘している。

カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について

- 10 Schlingloff, D., *op. cit.* [1981] pp. 187–188. シュリングロフはこの碑文の解読及び意味内容を以下のように解釈している。 *Der zukünftige Buddha wird nach seiner Geburt nicht von menschlichen Wesen, sondern von Göttern in Empfang genommen.* 「将来のブッダは誕生した後人間によってではなく、神々によって受け取られた」
- 11 『僧伽羅刹所集経』[T. 4 No. 194, 122 b 16–17] 僧伽跋澄訳 384. は誕生時の具体的な記述を欠いている。
- 12 片山一良『【パーリ仏典】第一期 5 中部（マッジマニカーヤ）後分五十経編 I』大蔵出版, 2001, pp. 30–31 参照。
- 13 Windisch, Ernst [1908] *Buddhas Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*, Leipzig, pp. 93–106. 水野弘元 [1957] 「釈尊の降誕に関する伝説の謎」『大世界』3 月号, pp. 28–32. 中村元 [1975] 『ゴータマ・ブッダー釈尊の生涯—原始仏教 I / 中村元選集第 11 巻』春秋社, pp. 53–62.
- 14 他の女性と差別するために立ったまま出産すると伝えられた仏母マヤーの出産場面が図像化される場合、その図像表現は樹下女神ヤクシーの図像を借用したと考えられている。(林良一 [1974] 『仏教美術の装飾文様③聖樹 2』『仏教芸術』96, p. 103. 宮治昭 [1996] 『ガンダーラ 仏の不思議』講談社, p. 135.) Śalabhañjika モティーフの例としても挙げられている。(Roth, Gustav [1986] “The Woman and Tree Motif — Śalabhañjika-Dīmalika in Prakrit and Sanskrit text with special reference to Śilpaśāstras including notes on *Dohada*.” Repr. in *Indian Studies (Selected Papers) by Gustav Roth*. Publ. at the Occasion of his Seventieth Birthday. Bechert, Heinz & Petra Kieffer-Pölz (eds.), Delhi, pp. 19–44 (Bibliotheca Indo Buddhica 32). Sander, Lore [2006] “Anmerkungen Zum Śalabhañjika-Motiv” In *Jaina-Itihasa-Ratna : Festschrift für Gustav Roth zum 90. Geburtstag*, Indica et Tibetica, 47, pp. 439–453.)
- 15 『仏本行集経』は帝釈、四天王の両方が登場する。また LV. のように帝釈のみならず梵天も登場する伝承が確認される。
- 16 Schlingloff, D., *op. cit.* [1981] pp. 185²²–187⁶.
- 17 2000 年に出版された 1996–7 年度の発掘報告以降に Sannati から Kanaganahalli へと名称が変更している。(Archaeological Survey of India [2002] “Excavation at Kanaganahalli, District Gulbarga,” in *Indian Archaeology 1996–7 A Review*, ASI, New Delhi, pp. 53–55.)
- 18 “Der Stūpa von Kanganahalli : Ein Symposium zu einem neu entdeckten buddhistischen Monument im Indischen Bundesstaat Karnataka,” in der Freien Universität, Berlin, 11–12 January 2008.
- 19 Meister, Michael William [2010] “Places Kings, and Sages : World Rulers and World Renouncers in Early Buddhism,” In *From Turfan to Ajanta Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion of his Eightieth Birthday volume II*, Lumbini International Research Institute, pp. 651–652.
- 20 筆者は平成 20–22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 20520050 研究代表者 荒牧典俊) 「大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究」の研究協力者

として現地調査を実施した。

- 21 拙稿 [2011]「カンガンハリ遺跡調査報告」『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』平成 20–22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 20520050, pp. 103–104. (Kanganhalli-Stupa 平面図)
- 22 Kanganhalli 14/19 の下区画に描かれた 5 人の女性と 2 人の童子のうち、一番右にいる女性が同じく右手で右耳のイヤリングを掴んでいる動作をして描かれている。(『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』前掲載書 [2011] p. 70.)
- 23 Schlingloff, Dieter [2000] *Erzählende Wandmalereien*. Vol. I Interpretation. Harrassowitz Verlag (Ajanta. Handbuch der Malereien 1), p. 51^{15–37}.
- 24 Zin, Monika [2011] “Narrative Reliefs in Kanaganahalli: Their Importance for Buddhist Studies.” In *Marg* 63. 1, pp. 16–17.
- 25 『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書』前掲載書 [2011] p. 98, p. 102.
- 26 島田明 [2006]「アマーラヴァティー大欄楯の研究 (2)―大欄楯の建造年代―」『MUSEUM』602, pp. 34–39. 3 期に分類される Amarāvātī の大欄楯のうち、その第 1 期欄楯の年代について、碑文の書体を手掛かりに論じられている。第 1 期欄楯の年代は、サータヴァーハナ初期、あるいは Sāñcī 第 1 塔に近い時期の造営とし、およそ紀元前 1 世紀後半頃に設定している。
- 27 Lüders, H., *op. cit.* [1963] p. 95.
- 28 1. (根本) 説一切有部: 1. *MSV.* (Ed. Gnoli, p. 45^{9–17}) = 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』[T. 24 No. 1450, 108 a 15–23] 義浄訳 700–711. ≅ 『衆許摩訶帝経』[T. 3 No. 191, 939 b 18–25] 法賢訳 985–994. II. Pāli: 1. *MN.* 123 *Acchariyabbhutadhamma-sutta* [*MN.* iii, p. 123^{10–25}] = 『中阿含経』「未曾有法経」[(根本) 説一切有部] [T. 1 No. 26, 470 b 28–c 10] 僧伽提婆訳 397–398. 2. *DN.* 14 *MAP.* [*DN.* ii, p. 15^{3–13}] = *MAV.* [Ed. Fukita, pp. 64–65] [東トルキスタン有部] = 『長阿含経』「大本経」[法蔵部] [T. 1 No. 1, 4 b 28–c 19] 仏陀耶舎・竺仏念共訳 413. 3. *Jātaka-attha-vaṇṇanā, Nid.* (J. I, p. 53^{10–19}) III. 仏伝 (1) 1. *Mvu.* [大衆部説出世間部] (Ed. Senart, II, p. 20^{18–21}) ≅ 『仏本行集経』[T. 3 No. 190, 687 a 7–c 1] 闍那堀多訳 523–600. 2. *LV.* ch.7 (Ed. Lefmann, pp. 83^{20–85}) = 『普曜経』[T. 3 No. 186, 494 a 27–b 2] 法護訳 308. = 『方広大莊嚴経』[T. 3 No. 187, 553 a 17–b 4/554 c 16–22] 地婆阿羅訶訳 683. 3. 『修行本起経』[T. 3 No. 184, 463 c 13–18] 竺大力・康孟詳訳 197. 4. 『太子瑞應本起経』[T. 3 No. 185, 473 c 2–6] 支謙訳 222–226. 5. 『異出菩薩本起経』[T. 3 No. 188, 618 a 18–21] 聶道真訳 280–312. 6. 『僧伽羅刹所集経』[T. 4 No. 194, 122 b 17–18] 僧伽跋澄訳 384. 7. 『過去現在因果経』[T. 3 No. 189, 625 a 24–b 4] 求那跋陀羅訳 394–468. IV. 仏伝 (2) 1. *Bc. Aśvaghoṣa* 著, I, v. 14–16 (Ed. Johnston, p. 2) = 2. 『仏所行讃』[T. 4 No. 192, 1 b 9–16] 曇無讖訳 414–426. = 3. 『仏本行経』[T. 4 No. 193, 59 a 7–15/a 23–25] 宝雲訳 424–453. 仏伝 (3) 1. *Śsṣj.* v. 5–6 (Ed. Hahn, p. 152)

カンガンハリ遺跡から出土した「ブッダの誕生」図について

- 29 MAV. [Ed. Fukita, pp. 64–65] も「七歩」→「灌水」の順で語られる。また LV. と『普曜経』も「灌水」→「七歩（宣言）」の順序で語られているが、七歩が一方のみならず全方角であったり、神々の賛嘆など装飾的な表現が多く付加されているので、本稿では該当文献として扱わない。
- 30 Kanganhalli では仏伝の場面を連続して描いた横石が数点出土している。横石の一場面に描かれた「誕生」図は、四天王の持つ布の上に仏足を表現したり、Nāgārjunakoṇḍa の作例のように空中に傘蓋と払子を描きレリーフ石版よりも発達した表現が見られる。